火の山と高原と温泉の町

阿蘇町は、熊本市の東方四十キロ、大分市の西方六十キロに位置し、東は一の宮町を隔て波野高原に接し、西は二重峠を境として菊池郡に、南は活火山中岳により南郷谷と接し、北は外輪山を越えて南小国町に境し、標高四百五十メートルから千三百二十三メートルの中岳噴火口に及ぶ、等高線上にある高地で、東西に十三キロメートル、南北に十五キロメートル、総面積百九十九・三一平方キロメートル、人口二万千四百三十五人の町です。

○　○

町の中央をほぼ東西に黒川が流れ阿蘇谷を潤し、黒川の流れに平行して国鉄豊肥本線が走り、町内に四つの駅を有しています。

道路は国道57号、212号の二線と県道13号線が走り、町道は四七・六%が舗装されています。

○　○

本町は昭和二十九年四月一日、旧黒川村・内牧町・永水村・尾ケ石村・山田村の五ケ町村が合併して誕生した町で、本町の象徴である阿蘇山から、阿蘇町と名づけられたものです。

○　○

本町の基幹産業は農業と観光であり、農業面では、田、三千五百五十ヘクタール、畑、千六百十ヘクタール合計五千百六十ヘクタールの耕地面積、乳牛九百四十五頭、肉用牛八千二百五頭を有し、米野菜、畜産等が農業経営の基盤となって、五十六億五千四百万円の粗生産額を上げています。

昭和四十六年から農業構造改善事業の一環として、大規模圃場整備事業に取り組み五十四年度で四六%が完了し、七千ヘクタールに及ぶ原野は、国営大規模草地改良事業で八百ヘクタールが改良され生産基盤の整備がなされています。又、四十一年に農事組合法人牧場を設立し、北海道からジャージ五十五頭ホルスタイン四十頭導入を皮切りに、現在は三つの農事組合法人牧場と一つの社団法人牧場が設立されており、導入牛も五百二十五頭と酪農経営の基盤となっています。

又、米の生産調整による休耕田を利用して菊の栽培と、五十四年から寒冷地に不向といわれている西瓜栽培等も行われていますが本町は米の依存度が高く、相次ぐ米の生産調整に即応できていないのが現況です。

○　○

観光面では、世界に誇る活火山と大草原を有し年間六百万人にのぼる観光客が訪れ、宿泊施設も旅館四十二、保養所十三、民宿五、ユースホステル一、を数えその大半が町の中央部に軒を並べ毎年観光シーズンになると観光客で賑わいをみせています。

しかし、九州横断道路の開通と57号線の整備によって、別府・雲仙方面へと素通り客が年々増加し、宿泊客の減少がみられ、特に五十四年は阿蘇山の度重なる爆発によって、長期にわたる火口立入り規制が敷かれ観光客も激減し、火口だけに依存する観光からどう脱皮していくか今後の課題になっています。

○　○

その他、体育施設、社会教育面でも、四十五年に一万四千平方メートルの面積のスポーツ公園が完成し、野球、ソフトバレー等に多くの利用があり、四十九年弓道場、五十二年には町の西部に面積二万三千平方メートル、公認ゲートボール場五十ケ所を持つ二つ目のスポーツ公園が、五十四年にも柔剣道場が完成して、住民の体力づくりに大きな役割をはたしています。又、四十三年床面積四百二十平方メートル、蔵書数一万四千九百七十三冊の町立図書館が開館し、図書愛読者に親まれ、五十一年には総合公民館が開館し、生涯教育の場として福祉増進に供しています。

○　○

又、豊かなふるさとづくりを目ざし五十三年から八月盆明けに火の山祭を実施し、阿蘇山上では世界大阿蘇凧揚げ大会町中ではびっくり夜市、花火大会、郷土芸能大会等が催され帰省の人々と住民の心を慰めています。

特に凧揚げ大会には、北海道、沖縄はもとより、台湾、韓国からも参加があり文字どうり世界の凧揚げ大会になっています。

○　○

活火山を有し利点も数えきれない程のものがありますが、反面火山爆発による「よな」被害も大きく、特に五十四年は度重なる火山の爆発によって毎日のように降灰があり、農作物の被害も一億四千万円にものぼり農家を悩ませ、観光客の激減によって商工観光業界に打撃を与え、地域住民を悩ませています。このことから、被害をうけている九町村が同時に降灰防除地域指定の要望を行っています。一日も早く国の対策が望まれているところです。

○　○

しかし、春は若草、夏は緑一色の大草原、秋になれば高原一帯に咲き乱れる野の花はとりどりの色を呈し、冬は山間の木々に樹氷が咲く、この四季を通じて美しい自然環境を生かした都市づくりに邁進し、世界に誇れる町にしていくつもりです。

◀大規模ほ場整備事業の基盤整備完了地域

▼第２回世界大阿蘇凧揚大会
台湾、韓国など外国からの参加もありました

54年９月６日阿蘇山大爆発の瞬間▶